第１９８回（令和２年５月３１日施行）

１級原価計算・工業簿記

第１問

従来通り「原価計算基準」の内容からの出題ですが，今回は○×問題形式で出題しました。受験生は決して勘に頼った解答をせず，よく吟味して解答をしてほしいものです。またいつものことですが，単に「原価計算基準」を丸暗記するのではなく，基本概念を中心に理解してもらいたいものです。

１．「原価計算基準」二からの出題です。

２．「原価計算基準」五及び十からの出題です。原価の分類の理解を問いました。非原価項目の意味も理解してください。本問では未稼働という状態が原価性を否定しています。

３．「原価計算基準」二五からの出題です。190 回に続いての出題です。工程別総合原価計算の振替関係（累加法）をよく確認してください。

４．「原価計算基準」三一からの出題です。継続製造指図書は，総合原価計算の場合に発行されるものです。正しくは，特定製造指図書となります。

５．「原価計算基準」四の（三）からの出題です。直接原価計算の意味をよく理解してください。今回出題した第３問と関係がある内容です。

６．「原価計算基準」四七からの出題です。実際原価計算の場合，材料受入価格差異以外の原価差異は，すべて売上原価に賦課されます。今回では，第４問の月次損益計算書がいい例になります。

第２問

製造業における仕訳の問題です。今回はすべて最近の過去問題を参考に出題してあります。

１．作業くずの評価額は，その分製造原価を減少させる効果があるので，仕掛品から控除する形になります。類題としては，例えば，193 回に同様の問題が出題されています。

２．得意先への製品販売時の仕訳問題です。原価の 25％増しが計算できるかがポイントになります。￥8,800×700 個×125％＝￥7,700,000 が売上となります。類題としては，例えば，196 回に同様の問題が出題されています。

３．部門別計算のうち，補助部門費を製造部門に配賦するときの仕訳問題で，頻出問題です。ただし，今回は具体的な部門名を勘定科目にしました。配賦額の計算方法ですが，例えば，切削部門へは￥8,400,000×55％＋￥3,900,000×70％＝￥7,350,000 が配賦されます。類題としては，例えば，194 回に同様の問題が出題されています。

4．組級別総合原価計算における，組間接費の配賦に関する基本的な問題です。4：6 の割合で各組製品（実際には各組仕掛品勘定）に振り替えます。類題としては，例えば，190 回に同様の問題が出題されています。

5．標準原価計算における作業時間差異の仕訳問題です。仕訳そのものは単純ですが，有利な差異か不利な差異かで仕訳が正反対になるので，注意しましょう。類題としては，例えば，194 回に同様の問題が出題されています。

6．本社工場会計の工場側の仕訳です。減価償却費の計上については，減価償却累計額勘定が本社側の帳簿にある点に注意してください。さらに勘定科目選択欄に減価償却費勘定が無いことから，製造間接費勘定に直接振り替えることになります。類題としては，例えば，192 回に同様の問題が出題されています。

第3問

直接原価計算制度の場合の勘定記入に関する問題です。今までは直接原価計算というと，損益計算書の作成と損益分岐点売上数量などを計算する問題しか出題されてきませんでした。一方で，標準原価計算の問題では，勘定記入に関する問題が数多く出題されています。このように，1 級の出題範囲の後半部分は出題の仕方が固定化されすぎている傾向が認められるので，今回初めて直接原価計算の勘定記入を出題した訳です。

初めての出題という点を考慮し，今回は問題文の指示に従って解けば 8 割は取れる形にしたつもりです。本問のポイントは二点あります。

一点目は，固定費は製造原価計算から除外されるため，全額その期（その月）の期間費用として損益計算書に計上されることです。すなわち，製造間接費の中の固定費の扱いに注意することになります。一旦，製造間接費勘定に集計したのち，変動費は仕掛品勘定に振り替えますが，固定費は月次損益勘定に振り替えることになります。

二点目は，販売費の振り替えです。販売費においても，変動費部分は貢献利益計算に組み込まれるので，振り替えも変動費部分と固定費部分を明確に分けて行う必要が生じます。こうしておいた方が，最後に月次損益計算書を作成するときにわかりやすくなると考えられます。したがって，問題の指示に従わずに販売費の固定費部分を先に振り替えた場合は，誤答とさせていただきました。

いずれにしても，今後このような形で再び出題されることもあると思うので，よく復習をしてください。

第4問

190 回に引き続き，1ヶ月間の工業簿記の一巡（取引から月次の財務諸表作成まで）に関する総合問題を出題しました。なぜ工業簿記一巡が重要かといえば，いわゆる製造業企業における財務諸表作成の流れを理解しておくことこそが，工業簿記の重要な目的の一つと考えるからです。

今回は久しぶりの出題ということもありますし，第３問が初出題という点も考慮し，問題の難易度はやさしめにして，その代わりに全体のボリュームを増やす形にすることで工業簿記全体の流れを理解できるようにしました。190回との違いは，外注加工賃の処理を出題したことと，製造間接費配賦差異が有利差異（貸方差異）になっていることの二つです。製造原価報告書と損益計算書では，差異の計算が正反対になることに注意してください。本問では有利差異なので，製造原価報告書では加算をし，損益計算書では売上原価から減算することになります。